HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	1910年代ドイツにおける政治的文学運動の諸相　－表現主義運動を中心として－
Author(s)	阿部, 和夫
Citation	独語独文学研究年報, 27, 39-53
Issue Date	2000-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/26127
Type	bulletin (article)
File Information	27_P39-53.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

1910年代ドイツにおける政治的文学運動の諸相
―― 表現主義運動を中心として ――

阿部　和夫

1．はじめに

日本におけるこれまでのドイツ表現主義文学の研究は、美学的側面を重視するものが大半であった。表現主義運動の担い手の多くが保持していた政治的エネルギーは、そこではこの芸術運動における美学的な傾向を分析するための手掛かりとして副次的に取り扱われることが多かったのである。しかしながら、ドイツを初めとする欧米諸国においては、表現主義を第一次大戦前後の激動期を象徴する「時代概念」と位置付け、様々な社会・文化現象、世界観や近代の価値観との関連性を追求した研究が数多くなされている。[1] こうした状況に鑑みると、表現主義運動と呼ばれている複層的・複合的な芸術活動がどのように同時代の社会変動や政治問題と関わりあってきたのかという問題について論じるためには、美学・芸術論にとどまらない広い視野をもった社会史的なアプローチが必要である。というのも、表現主義運動の担い手達が保ち続けた「文学活動によって社会を変革する」という基本的な姿勢は、ナチス・ドイツ時代の中断期を経て、第二次大戦後の西ドイツ文学界においても引き続き重要な役割を果たし、とりわけ現代ドイツ文学のあり方にも大きく影を落としているからである。したがって、表現主義運動の全体像を従来の文学史のように作家と作品の解説という形式で描くのではなく、このような社会的広がりをもった活動を可能にした諸条件（背景）を明らかにし、現代の文学活動において、それらの要素がどのような形で残り続け、いかなる帰結をもたらしたのか、という点についての考察を進めていくことが、今後の文学研究にとって重要な課題であると考えられるのである。

本論は、20 世紀初頭から第一次世界大戦を経てワイマール期に至るまでの時代における政治的な文学活動を研究するための予備的考察である。この時代区分は、ドイツ文学史で一般的となっている概念「表現主義の十年間」すなわち 1910 年から 1920 年までの 10 年間に相当する。本論では、今日「表現主義者」と名指しされる作家・詩人を中心として、彼らがこの時代に行った政治的発言を分析し、この時代における文学運動と政治状況の間にある特徴的な相互作用や社会状況（特に第一次世界大戦）との諸関連を浮き彫りにすることを主眼とした。したがって抒情詩や小説などの文学的解釈を必要とするテクストは避けて、政治的なアピールや声明文、エッセイ、日記といった、より明快な形で意見が述べられているテクストを中心に取り扱った。こうした資料と当時の社会的、政治的な傾向を結び付けて検討することによって明らかになると考えられるのが、近代国家となって間もないドイツにおいて、文学がどのような政治的機能を持っていたのか、さらに文人、文筆家、著述家は文学に対して何を期待しどこに理想を置いていたのか、といった点である。本論で特に重点を置いたのは、政治活動と文学活動は表裏一体であると考えていた文学者（そのほとんどは今日表現主義グループの一員に数え上げられている文筆活動家である）の声である。彼らには共通の特色がある。そのほとんどが 1910 年代において二十代、三十代の若者たちであったこと、教養市民層出身であること、そして大学教育を受けていることである。ヴィルヘルム帝政期の既存の価値観を覆し、新しい社会と芸術を目指した若者たちは、突然天から降

るようにして現れたわけではない。そこには、彼らと彼らの革新的思想を生み出すことになった特異な社会状況というものがあった。これを明らかにし、さらに社会に働きかけようとする文学者の発言、彼らが社会に翻弄される様子を追及していくことによって、政治と文学の相互作用における一つのパターンにもまた光が当たることになるだろう。

2．表現主義の十年間

すでに言及したように 1910 年から 1920 年は、ドイツ文学史上「表現主義の十年間」と呼ばれている。1910 年 3 月、表現主義の二大雑誌のひとつである «Der Sturm» がヘルヴァルト・ヴァルデンによって、翌 11 年には «Die Aktion» がフランツ・プフェムファートによって創刊されている。これら二つの雑誌を中心として新しい形の過激な前衛芸術が紹介された。興味深いことに、両誌においては創刊当初、表現主義 Expressionismus という言葉はまったく使われておらず、共通して見られる特徴といえるのは、従来の古い硬直した芸術の克服と新たな芸術理論、激しい文化批判、および今までにない文学形式や前衛芸術への期待といった点であった。[2)]

雑誌 «Sturm» の創刊当初、執筆者として名を連ねていたのは、ルードルフ・ブリュームナー、アルフレート・デープリーン、S．フリートレンダー、フェルディナンド・ハルデコフ、ジークムント・カリシァー、ルードルフ・クルツ、エルゼ・ラスカー＝シューラー、ルードウィヒ・ルービナー、ルネ・シッケレ、マリオ・スピロ、フェリックス・シュテッシンガー、オスカー・ココシュカらで、いずれも表現主義運動の論客として以後名をはせることになる面々である。彼らの中でも、ルネ・シッケレは 1913 年創刊の雑誌 «Die Weißen Blätter» の編集長として（1914 年以降）活躍、クルト・ヒラーは 1916 年に雑誌 «Das Ziel» を創刊している他、様々な雑誌において独自の芸術論や文化批判を展開している。この «Sturm» 誌の 1912 年における発行部数は約 1 万部。この数字は、1890 年創刊の著名な文学レヴュー «Die Neue Rundschau» の 1911 年における発行部数が 7000 部、その後の 20 年代も 8000 部から 1 万 2000 部程度であったのと比べると、当時においては相当に大きな数字であるといえる。したがって、 «Sturm» 誌がある程度の社会的・文化的な影響力をもっていたことは間違いない。さらに、この «Sturm» グループは、雑誌発行の他に、講演会や朗読会、絵画展を開催し、劇場や芸術学校までも作り上げているのである。[3)]

一方、 «Sturm» 誌に遅れること約一年、1911 年に発刊された «Aktion» 誌は、その 1912 年以降の「自由な政治と文学のための週刊誌」というサブタイトルが示す通り、文学のみならず政治を中心テーマとして取り扱っている。冒頭には時事問題を語る論説文が掲載され（著者はほとんどの場合、編集長のプフェムファート）、国内外の政治状況を論評し、政党批判まで行い、その舌鋒の鋭さは傑出している。さらに、この雑誌において初めて、ゲオルク・ハイムや、E．ブラス、W．クレムといった当時まだ無名であった詩人の作品を世に送り出してもいる。寄稿者として名を連ねているのは、フーゴー・バル、ヨハネス・R．ベッヒャー、オットー・ブライ、ヤーコブ・ファン・ホディス、マックス・ブロート、イヴァン・ゴルらの詩人たち、それに編集長のプフェムファートを始め、ヒラー、ハインリッヒ・マン、ローザ・ルクセンブルク、エーリッヒ・ミューザムらの論客である。フーゴー・バルは後にダダイズムの旗手として活躍した人物である。ローザ・ルクセンブルクは社会主義運動の大物であり、またミューザムは左翼思想家で、後に東独の文学研究家から「無政府主義者」[4)] と名指しされている人物である。今日表現主義者に数え上げ

られている人々の他にも、さらにこうした多彩な執筆者が参加していることをみると、この «Aktion» グループの思想が、極めて多岐にわたるものであり、一致していたのは現体制に対して批判的であったという点のみであるということが考えられるのである。1913 年における発行部数は 5000 から 8000 部であった。[5]

上記の二つの雑誌の性格からもわかるように、いわゆる表現主義運動において特徴的なのは、関係する領域が非常に広いということであり、実際にそのことが文学研究としての取り扱いを困難なものとしている。文学はもちろん、美学、思想、哲学、社会参加、政治など多岐にわたる複合的な運動なのである。中でも政治状況との関わりは特に重要度が高い。表現主義者たちの活動が盛んであったのは、ドイツ社会の不安度が増した第一次大戦前後の危機の時代においてであり、ドイツ革命後のワイマール共和国時代に入り政治状況が一時的な落ち着きを見せると、彼らの活動はたちまち精彩のないものとなっていくのである。その原因は、彼らの多くが文学を手段として社会を変革することを望んでいたことにあり、また彼らにとって文学活動と政治活動は別個のものではなく、同一の活動の表と裏であったことにある。いわゆる表現主義者たちの関心は単に美学的なものだけにとどまらず、むしろ社会的、政治的なものに対してより強く向けられていたために、政治状況の安定は、彼らの創作活動には逆にマイナス要因になるという皮肉な結果をもたらしたともいえるのだ。このことは、政治色の比較的薄かった «Sturm» 誌[6] にも、また政治的アピールを強烈に前面に押し出した «Aktion» 誌にも同様に当てはまることである。

表現主義文学の集大成として挙げられるのは、クルト・ピントゥス編纂の『人類の薄明』(Menschheitsdämmerung) およびアルフレート・ヴォルフェンシュタイン編纂の『反乱』(Die Erhebung) という二大アンソロジーである。前者は 1919 年末に、後者は 1919 年から 20 年にかけて編まれているが、これらのアンソロジーが既に「集大成」であり、これ以降傑出した作品が極めて少なくなることからもわかるように、すでに 20 年代に入ると、表現主義運動の担い手たちの活動は下火になり、彼らの叫びだけがむなしく響き渡り、反響が返ってこない状況になっていくのである。多くの表現主義の運動家たちが、戦前の小市民的な文化に反発し、社会と芸術の革新を求めていたことははっきりしている。ただし、その理想像はかなり抽象的であいまいなものであった。ユートピアという言葉がしばしば口にはされたが、それが指し示すものの具体的な像は容易には浮かび上がって来ないのである。

3．第一次世界大戦勃発前後の状況

いずれにせよ、1910 年頃にその端緒がみられる文学における表現主義は、敗戦をきっかけとして表舞台に出ることができ流行となりかけたときには、既にその衰退と終焉が目前に迫っていたのである。しかしながら彼らが活動した表現主義の十年間は、ドイツ史上、いや世界史上最重要な事件が立て続けに起こった時代でもあった。1914 年の第一次世界大戦の勃発、1918 年の敗戦とドイツ革命、そしてワイマール共和国成立へと向かう一連の混乱状態である。文学活動を政治活動と同一視していた表現主義の運動家たちはこの政治と社会の激動とどのように向かい合ってきたのだろうか。

3．1　第一次大戦前における好戦的雰囲気

1910 年、ドイツ帝国は全般的に危機的状況にあった。国内においては、金融資本の独占化にともなう富の偏在（ベルリンの九つの銀行が全ドイツの銀行資本の８割以上を管理していた）が経済的不平等と階級間の格差をもたらしていた。この年、3194 件のストライキおよびロックアウトが行われ、約 37 万人の労働者が参加している。国内の矛盾から国民の目を逸らすために冒険的な対外政策を推し進めることは、国家権力の常套手段である。そこで皇帝ヴィルヘルム２世もまた、積極的な帝国主義政策を推進し、イギリスやフランスに対して植民地の再分割要求を行ったのである。イギリスを追い越してヨーロッパ最強の工業国へと駆け上がってきたドイツ帝国にとって、海外市場の確保は必要なことでもあった。こうして 1905 年のタンジール事件、1911 年のアガディール事件と、一触即発の緊張状態が続き、さらにバルカン半島においては、汎ゲルマン主義と汎スラブ主義の対立が、軍事的衝突の危険をますます増大させていった。

こうした状況の中で、国内における好戦的な気運が、国粋主義者のみならず全国的に様々な階層の人々の間でも盛り上がってくる。1871 年のドイツ統一に際しても、それを可能にした最大の要因がフランスに対する軍事的勝利であったことは、まだ人々の間には輝かしい記憶として残っており、それから四十年を隔てた 1910 年前後においても、戦争が有効な政治手段と考えられていたのであった。こうした考え、つまりドイツ民族の威信を示し、ヨーロッパのみならず全世界においてドイツ帝国の地歩を固めるために武力に訴える、という考え方は、当時においてはそれほど危険で不自然なものだとは思われていなかったのである。ドイツ帝国が敢行する戦争は「聖戦」なのであって、これによって帝国がさらなる発展と前進を遂げるのだというプロパガンダが、右翼ナショナリスト諸団体だけではなく、様々な団体によってなされた。たとえば約 1000 人の知識人を構成員として有し、その中には社会民主党員もいれば右翼活動家もいる「ドイツ学者・芸術家連盟」は一貫した戦争宣伝を行っている。経済界に絶大な力を持つユダヤ人資本家ヴァルター・ラーテナウや歴史学者フリードリッヒ・マイネッケらを中心に結成された「ドイツ協会・1914 年」も同様の戦争宣伝に大いに寄与した。また、「ドイツ作家保護協会」は、「血によって書き記すのだ。そして血こそが精神であることを体験できるだろう」[7] という言葉をモットーに、積極的な戦争賛美を行っている。この組織は、ドイツ民族のアイデンティティを形成するための、さらに国民が一体となって戦争に向けて進んでいくための中心的な役割を果たしている。これに際して崇拝されるべき偶像の役割を果たしたのが、ゲーテやフィヒテといった過去の巨匠たちであった。ドイツ作家保護協会が 1914 年に発行した『兵士の本』[8] に収録されたのはフォンターネ、メーリケ、ケラーらの愛国主義的詩作、リリエンクローン、トーマの小説、それにヘーベルやクライストらが綴った逸話であった。さらにこの本の最後には、フリードリッヒ大王、ビスマルク、モルトケらの言葉を引用した軍国主義的な「ドイツの名言」コーナーという決定的なおまけまで付いていたのである。

こうした好戦的な潮流は、多くの芸術家たちによって様々な形でとりこまれた。芸術における伝統的・保守的な態度を好ましく思わなかった芸術家たち、特にブルジョア的な文化を忌み嫌う

若い世代の間では、戦争に対する期待が違った意味で広がった。彼らが抱くようになった期待の中身は、戦争こそがこの閉塞した社会を打ち壊して新たな未来を開く契機になるにちがいない、といった、今日では考えられない過激な思想であった。少なくとも開戦前においては、戦争を真正面から否定するような冷静な考え方は、極めてまれであったといってよいだろう。[9]（この点については 3．2 において詳しく取り上げる。）

一方、ドイツの国政の一翼を担う帝国議会においてヴィルヘルム帝政への不満を吸い取る母体となったのは、当時ドイツで唯一の社会主義政党であった社会民主党（Sozialdemokratische Partei Deutschlands, SPD）であった。現状打破への国民の期待を担って、飛躍的に勢力を拡大した同党は、1912 年の帝国議会選挙では投票数の 35％にあたる 400 万票を獲得し、第一党へと躍進する。また、国際的な労働者組織第二インターナショナルの中心的存在として、国際的な平和主義運動の拠り所でもあった。1914 年 6 月 28 日におけるオーストリア皇太子の暗殺事件以降戦争の危険が高まると、同 7 月 26 日に社会民主党主催の大規模な反戦デモが行われている。しかしながら、1914 年 8 月 4 日、社会民主党の主流派は、時勢に押し切られる形で開戦に際して挙国一致で戦争に協力することを承諾し、第二インターナショナルの「戦争が勃発した場合、ゼネストを含むあらゆる手段で戦争行為を妨害する」という決議を反古にしてしまったのである。

このような状況において、先に述べた戦争による現状打破への期待が、社会的不満をもつインテリ層の若者たちへ、さらには若年層以外の様々な世代や階層へと広がっていくのである。さらにもうひとつ見逃せないのは、「フランス流の啓蒙主義 対 ドイツ精神」という対立構図が戦争宣伝に利用されていたことである。「ドイツ精神」という言葉は、当時においては、フランスやイギリスの啓蒙主義思想に対抗したドイツ民族の独自性・優秀性を強調する象徴的な言葉であった。また、ドイツ帝国建国前からの宿敵フランスは、ドイツ民族主義や国家主義の立場から国民意識高揚のために利用される格好の餌食であった。「ドイツ精神 対 不倶戴天の敵であるフランス啓蒙主義の精神」というこの誤った図式を普及させ定着させた機関のひとつとしては教育が挙げられる。教育学者のルドルフ・レーマンや、ギムナジウム教師で学校用読本の編集を行っていたパウル・ゴルトシャイダーらは、ドイツ古典主義のルーツをフランス文学ではなく、ギリシア・ローマやドイツ啓蒙主義に求める考え方を教育界において定着させようという試みを行っている。[10] ゴルトシャイダーの考えが書物として発行されたのが 1889 年[11]、レーマンが彼の教育理論をまとめて出版したのは 1890 年であった。[12] さらにドイツ文学語学研究の大家として知られるルドルフ・ヒルデブラントも、フランス流の世界市民主義を皮肉っている。[13] 国粋主義思想は大学においても学生組合を中心として、世紀転換期頃に非常な高まりをみせている。[14] このような愛国主義的な教育を受けて育った若者たちが、いわゆる表現主義運動を担うことになる世代を形成していくのである。父なる世代への反抗をそのエネルギーの源とし、古い因習的なものの見方を捨て去ることを出発点としていたはずの表現主義作家たちは、当然このような愛国主義に対しても反発していたものと考えてもおかしくないはずなのだが、実際には全面的にそうであったとは言い難いのである。むしろ彼らの思想においては、特に「ドイツ精神」への崇拝、ドイツ民族の優秀性への信仰が観察できる場合も少なくない。そしてこうした「ドイツ精神」の賛美者たちは、戦

争を熱烈に支持した若い世代の文学者たちとも重なり合うのである。

> 7月6日。ああ、恐るべきことだ。1820 年でさえこれほどひどくはなかった。いつでも同じだ、退屈で、退屈で、退屈で。まったく何事も起こらない。なにごとも、なにごとも。しかしひとたびこの日常の味気無さを全く残さない何かが起こってくれないものか。[...]
> ひとたび何かが起こってくれないものだろうか。再びバリケードが築かれれるならば、私は真っ先にその上に立っていることだろう。そして心臓に受けた弾丸にさえ、熱狂による陶酔を感じたいと思うことだろう。あるいは、不当なものであっても構わないから戦争が始まりさえしてくれればよい。この平和は、古い家具の光沢のように怠惰でねとねとしてべとべとと汚れている。[15]

これは 1910 年に、表現主義における代表的な詩人であるゲオルク・ハイムが書き記した日記の一部である。さらに、翌年の 1911 年 9 月 25 日、彼の日記には次のような記載がある。

> 神よ、わたしはこの陳腐な時代にあって、自分の抑えこまれたままの熱情によって息が詰まりそうだった。というのも、幸福であるためには、わたしには暴力的で外的な感情が必要なのだから。醒めた幻想の中でわたしは、わたし自身をダントンやバリケードの上に立つ一人の男の姿として見る。ジャコバン党の帽子なしには自分自身について実際なにも考えられない。今望んでいるのは少なくとも戦争なのだ。[16]

このハイムの日記には、現実の政治・社会状況を深く省察している形跡はなく、多分に気分的・感情的な要素に支配されているように考えられる。しかし、戦争への期待は、そこで起こるであろう悲劇や恐怖を押しのけて、若い詩人たちの心をしっかりとらえていた。さらにこの日記から読み取れるのは、歴史学者のクラウス・フォンドゥングが指摘している「戦争の黙示録（終末論）的解釈」[17] である。世界の没落の後には新しい完全な世界が現出するという思想が終末論であるが、「世界の没落」は「戦争」という言葉に容易に置き換えることができる。フォンドゥングによると、このような戦争観は 1914 年以降、ルードルフ・オイケン、オットー・フォン・ギールケ、アードルフ・フォン・ハルナックらの大学教授陣が講演や執筆活動によって広めたとされているが、ノーベル賞受賞者のオイケンらの宣伝活動を待つまでもなく、戦争が始まる 4 年前にすでにこうした戦争賛美が、若い詩人の心に棲みついていたのである。

> この偉大なる戦争によって、不当にも我々の世紀(20 世紀)に持ち越された数多くの事々とともに、これまでドイツ人がお人好しにも満足してきた偽りの芸術は、その終りを迎えることだろう。
> 音楽・文学・芸術に、形式を創り出すような新たなものを取り入れようというドイツ人の衝動は、一世代前ではあまりにも希薄であった。その結果、古き良き芸術の形式を最も悪い形で、ぼろぼろになるまで繰り返すということに陥ってきた。全体としてのドイツ民族は、この偉大なる戦争が避け難いものであることを個々人よりも強く予感し、その全神経を戦争に向けて張り

巡らせていたのだ。[18]

ドイツ民族は予感した、まずは偉大なる戦争によって前進し、そして新たな生活と新たな理想を形成することを。[...]

我々は最初から仕事を始めていかなければならなくなるだろう、この偉大なる戦争という学校において、まずは我々自身について、次に我が民族について。というのも、大きく一息つく際には、ドイツ人も再び、自分たちの芸術について問うことになるのだから、そして芸術なくして成熟期にあったことはかつて一度もなかったのだから。

良きものだけが残るのだ、真正の、内容が難解で、真実なるものだけが。それらは戦争の煉獄の炎によって清められ、照らされつつ進むのである。[19]

これらは、表現主義の画家フランツ・マルクが1915年に一志願兵として戦場に赴き、戦地で書き綴った論文の一部である。戦地にあって、死と常に向かい合いながらも、彼は戦争を賛美しつづけた。[20] 彼の文章からもやはり、終末論的世界観、ドイツ民族・ドイツ精神の賛美が読み取れる。ハイムと同様にマルクもまた、父の世代の価値観すべてを否定してはいないのである。確かに彼らは今までとは異なる新しい芸術および価値観、さらにはそれらを可能にする新しい社会を希求した。しかしながら、数世代に渡って積み重ねられた「ドイツ精神」を完全には捨てきることができなかったのである。このことは «Die Neue Rundschau» 誌上で戦争擁護論を展開した アルフレート・ケア、フランツ・ブライ、ロベルト・ムシルらについても同様である。また、言論だけではなく、実際に行動を起こした、つまり義勇兵として前線に赴いた、表現主義と関わりの深い芸術家としては、既述のフランツ・マルクの他にも、ルードルフ・レオンハルト、エルンスト・トラーらの名前が挙げられる。

戦争勃発から二年さかのぼる 1912 年に «Sturm» 誌上にイタリア未来派の主唱者マリネッティの『未来派宣言』が掲載された。このドイツ表現主義とほぼ時を同じくした急進的な芸術運動は、過激で暴力的なアジテーションで名を馳せた。例えば、『未来派宣言』の中には次のような項目も見受けられる。

我々は戦争を褒め称えよう、世界で唯一のこの清廉なるものを、軍国主義を、愛国主義を、無政府主義の破壊的振舞いを、殺すという美しい思想を、そして女達への軽蔑を。[21]

この『未来派宣言』は一部の表現主義者たちの間でもてはやされ、批判よりもむしろ過激な表現やタブーに挑戦する態度に好意的な目が向けられている。少なくとも、表現主義者の中の戦争推進派グループには、同様の思想が垣間見られるのである。

戦争を賛美し、大きな期待を寄せていたのは表現主義の周辺にあった作家たちだけではなかった。実際に戦争が始まった直後は、国中が戦争熱に浮かされた状態であったと言っていい。表現主義詩人たちをはじめ若い世代に大きな影響力をもっていた作家フランツ・ヴェーデキントも、

愛国主義的な新聞記事の執筆を手がけている。[22] 中でも当時のドイツ文壇に大きな影響を与えたのが、トーマス・マンが «Die Neue Rundschau» 誌上で展開した戦争擁護論である。後に出現するナチズムに対して真正面から戦いを挑んだトーマス・マンも、第一次大戦勃発当時は戦争肯定派としての態度を明確に打ち出していたのであった。

> 我々が至る所でうんざりしきっていた平和な世界を中断してくれたことに対して、芸術家は、芸術家の兵士は、神を称えるべきではなかったか！戦争！我々が感じていたもの、それは浄化であった、解放であった、そして途方もない希望であった。これについて詩人は語ったのだ。ただこのことについてのみ。[23]

美術評論家のなかでも表現主義芸術の強烈な礼賛者である フリードリッヒ・マークス・ヒュープナーもまた、新しい芸術を生み出す母体が戦争であることを強調している一人である。

> 実際に、発展は途切れた。しかし、発展が中断しているのは戦争中の短い期間だけである。発展が再び傷を癒し、以前にも増して力強く自己形成されることだろう。というのも、少なくともわたしにとって、関連と因果関係はまさに逆のものとして映っているからだ。すなわち、戦争はいわゆる新たな芸術を統合するのではなく、その予期せぬ勝利に満ちた完成像なのだ。[...]
> そして戦争がやってきた。それもあの芸術家たちや神秘主義者たちが待ち望んでいたことが突然現実となったのである。魂が顕在化した。この一撃で 6800 万の国民は、肉体、衣服、日常の気がかりから解き放たれ、他ならぬ高揚、精神性、意志、決断そのものとなった。[...]
> この戦争は「表現主義」を一掃しなかった。それどころか、まさにその正当性を並外れた強力な力で示し、満たし、証明したのであった。[24]

ここでも垣間見ることができるのが、先に述べた「戦争の黙示録的解釈」とドイツ民族に対する特別な思い入れ、言い換えると「ドイツ精神」への賛美である。この二つは当時の教養市民層の多くが抱いていた基本的な思想潮流であったといってもよいであろう。過去の価値観を乗り越えた前衛芸術を標榜した表現主義活動家とはいえ、こうした過去の呪縛からみずからを解き放つことはできなかった人々もいたのである。「ドイツ精神」を信奉する思想は、実際の政治においては帝国主義以外に行き着く場がないのだ、ということに、当時の活動家の多くは気づいていなかった。そしてこれでは当時のヴィルヘルム体制を完全に否定していくことなどできなかったはずなのである。しかも、文学活動を通して社会を変えて行こうという試みは、戦争賛成に回った表現主義者たちにとっては、戦争を社会変革の起爆剤に求めるという受動的立場を超えるものではなかった。そういった意味では、社会に働きかけようとしたこれらの活動家は、逆に社会状況の変化によって翻弄される形で己の情熱を冷まされることになるが、それは実際に戦争が大量虐殺の様相を示し始めてからのことであった。

3．2　少数派だった反戦思想

少なからぬ数の表現主義運動家たちが、来るべき戦争に対して好意的な目を向けていたのに対して、第一次世界大戦勃発以前から戦争に反対の立場を表明していた表現主義活動家は、わずかしかいなかった。中間的存在として、一般的な好戦的雰囲気から距離をおいた一連の詩人たちはいた。カール・クラウス、アネッテ・コルプ、ヴァルター・ハーゼンクレーバー、レオンハルト・フランク、アルトゥール・シュニッツラーらは戦争に関しては口を閉ざして何も語らない態度に出た。こうした中で断固として反戦の立場をとった論客の代表者は、雑誌 «Aktion» の編集長フランツ・プフェムファートである。

> 戦争反対の立場と平和を愛する立場があるにもかかわらず、この恐怖を弾劾する力強い声はあがらない。そして、戦争とその原因となる諸前提についての終わりのない考察・熟考はすべて、国民大衆内部にある戦争の本質についての立ち入った洞察、戦争を歴史的に克服する可能性をも指摘し得るような洞察にはたどり着かない。戦争の断罪が、みずからの国民的・国家的あるいは政党政治的なエゴイズムと無縁であったためしはない。そして戦争についての熟考は、この現象に対して根本まで至ることはなく、むしろ偶発的な部分的原因を出発点としているのである。戦争そのものに対する戦争は行われないのである。[25]

当時としては先進的な卓見である。だが、この論説の著者プフェムファートのように、ドイツの愛国主義の精神に正面から戦いを挑む冷静な姿勢は、表現主義運動家の間では例外的なものであった。さらに 1911 年の «Aktion» 34 号では、彼の批判は、戦争に断固たる反対姿勢をとらない社会民主党主流派に向けられる。

> 社会民主党は軍国主義を批判する。しかし、真剣に反軍国主義的プロパガンダを行うには、あまりにも合法的に振舞い、自分達の政治的「見かけ」をあまりにも気にかけすぎている。彼らは戦争には反対する。しかし、こうした姿勢にありながらも、«Vorwärts»[26] は、彼らが「本当に」国民の死活問題に際した場合には議論をし直す可能性があるということを認めている。[27]

ロシアに対して動員令が布告された 1914 年 8 月 1 日に出版された «Aktion» 31 号において、プフェムファート は最後の戦争批判を試みる。これは戦争協力へ傾きつつあった社会民主党多数派に向けての痛烈な弾劾であり、彼らの中にもすでに国家主義、国粋主義が浸透してしまっていたことがはっきりと指摘されている。

> 理性の時代ではないのに理性の言葉で話すのは愚かなことだ。今日において宣言を記すこと、平和に賛成する決意を作り上げること、これほど無駄で意味のないことはないだろう。そして、国際的な社会民主党が今、彼らの同志たちがすでに行進しようとしている場で、決まり文句のように声高に「戦争という恥辱に烙印を押す」としても、かれらの指導者を嘲笑するか、あるい

は鞭打つしかないのである。というのも、ヨーロッパの諸国民が、(五十年前と同様に)今日でもまだ世界が焦土と化す可能性にびくびくしなくてはならないのは、みじめったらしい議席にむさぼりつく連中の職務怠慢のせいであるからに他ならない。大袈裟に無益なおしゃべりばかりする 400 万人の党員が、数十年間にわたって国粋・国家主義で鍛え上げられていなかったならば、たとえ戦争を叫ぶ声があったとしても、我々は今日それを軽い気持ちで受け取ることができたはずである。[28)]

こうした声は、国粋主義、国家主義によって、あるいは「ドイツ精神」の賛美によって鍛え上げられた当時の大多数の国民が共感できるものではなかった。彼らが信じていたのは、むしろ祖国防衛戦争として戦いの正当性、フランスやイギリスに不当に押え込まれてきたドイツ民族の利権の拡大、ロシア帝政から東方地域を防衛する必要性、といった、より具体的な形で理解することができる様々な開戦の理由付けであった。この評論を最後に、«Aktion» 誌は直接的な戦争批判を控えるようになった。当局による検閲の圧力のためである。しかしながら、検閲ぎりぎりの間接的な戦争批判に加え、解釈次第では反戦詩と受け取れるような作品を掲載することにより、戦時中も平和主義を貫き通したのであった。大学、文壇、ドイツ作家保護協会などの文筆活動家組織、ドイツ作家連盟、ドイツ協会 1914 年といった知識人の諸組織が戦争擁護論を展開しているなかで、«Aktion» 誌が終始戦争反対の立場を取り続けたという事実が、後世に表現主義とは反戦であり平和主義なのである、というイメージを与えた一因となっている。しかしながら彼らは表現主義者の中でも決して多数派であったわけではなかったのだ。

一方、ルネ・シッケレを中心とした «Die Weißen Blätter» 誌のグループはスイスで平和主義、反戦の言論活動を行っている。そこでは戦争に反対するだけではなく、平和主義のあり方にメスをいれたものもある。

ある雰囲気を作り出し、—— そういう表現が許されるならば —— それを固めることよりも多くを平和主義に期待している人々は、間違いを犯し、その上、平和主義の代表的な指導者たちに対して不当な行いをしてもいる。平和主義とは政治運動ではなく、精神的な憲章であり、そのもとで個々人が存在し、主張し、行動するのである。[29)]

このように、言論の自由が認められていた «Die Weißen Blätter» 誌は、大戦中の反戦派の中心的存在であり続けた。一方、ベルリンでの反戦派の中心組織は雑誌 «Das Ziel» を中心とした Aktivist（行動主義者）のメンバーで、中心人物はクルト・ヒラーとハインリッヒ・マンであった。しかしながら、当局による発刊禁止処分によって沈黙せざるを得ない状況に追い込まれてしまっている。

一貫して戦争反対を訴えた作家は多くなかったが、戦争開始後から約 1 年を境に、少なからぬ数の表現主義者が、平和主義者に転じている。開戦当初、勇ましく志願して出征したフリッツ・フォン・ウンルー、ルードルフ・レオンハルトは 1916 年のヴェルダンの戦いを境に反戦派へ、エ

ルンスト・トラー、 ベルトルト・ブレヒト、クラブントらも戦争への熱狂から批判に転じた人々である。この推移をクラブントは1917年にこう描いている。

> 陶酔からの決別、1914年！ あきらめ、1915年！ 疑い、1916年！ 立ち上がれ！ 新たな時代の新たな意志のために！ 長い間張り詰めていた弓のように、消極性から積極性へと急ぎたまえ。[30]

これまでにない大量殺戮を伴う近代戦は、開戦前の好戦的かつ楽観的な雰囲気を吹き飛ばしてしまったのである。文筆活動によって現実を変えていこうとした人々、中でも戦争を待望してきた人々は、予想外の現実を前にして、自分たちの戦争観、さらには自己のあり方を変えていかざるをえなかった。そして戦争への期待を裏切られた作家たちの新たな拠り所は、やがて起こることになる革命に向けられていくことになる。

4．国家主義・国粋主義の呪縛に抗する動き

3.1 の終わりの部分で述べたように、多くの知識人や作家たちは、「ドイツ精神」を賛美する思想が実際の政治においては帝国主義や国家至上主義へ、そして最終的には戦争へと向かっていくしかないことに気づいていなかった。あるいはこうした図式に気づいていながら、1914 年の段階では積極的に反対する具体的な意義や見通しをまだ見いだせずにいたと言ったほうがよいだろう。しかしながら、「フランス啓蒙主義」と「ドイツ精神」を対立させてドイツ精神に軍配をあげる構図、すなわちフランス敵視、愛国主義礼賛に直接結びつく思想にいち早く危機感を抱いていた作家もいた。その中で最も重要なのは、ハインリッヒ・マンであろう。彼の思想は、表現主義運動家たちの活動に対してひとつの指針を与えることになった。彼は1911年の『精神と行為』において、ドイツの古来の伝統的な支配者への従順さを、フランスにおけるルソー以来の合理主義と比較し、痛烈に批判している。

> ルソーからゾラに至るまで、既存の権力に疑問をいだいたフランスの作家たちは苦労しなかった。彼らには国民がいたのだから。権力を疑ってかかる文学的本能をもった国民、権力と理性が矛盾するような場合にはただちに権力を耐え難いものと感じることができる熱い血を持った国民。[…] 精神はここではドイツ人の場合のように希薄で亡霊じみたものではない。[31]

この個所において、ドイツ民族の独自性や優秀性にあくまでも信をおき、保守革命を目指したトーマス・マンとの大きな対立点を見出すことができる。ハインリッヒ・マンは、大胆にもドイツ精神ではなくフランス精神（フランスの啓蒙主義と言いかえることができる）の優秀さに軍配を上げているのである。そして彼のドイツ精神への批判はさらに以下のように続く。

精神に対する不信は、人間そのものに対する不信であり、自己に対する信頼の欠如である。個々人がみずからが守られることを好み、奉仕していると考えているのだから、そんな彼らが、民主主義を、自分達が主人である民族をいかにして信じることができようか？[32]

次に、彼の批判はこれまでの文士の権力との馴れ合いに対して向けられ、精神をつかさどる文士のあり方、使命についての持論の展開へと至る。さらに彼は、「精神（Geist）」という言葉から、これまで付与され続けてきた概念である「ドイツ民族の独自性、優秀性」を取り去ろうと試みているのである。

国民が支配すること、そのことによって彼ら（文士たち）が支配し、精神が支配するようになるべきであろう。文士たちはこの民族に、自分たちをより尊重しより暖かく感じ取ることができるように、真実を知るという幸福を伝えるべきである。時代が要求していること、そして栄誉が求めていることとは、文士たちがついに、ついにこの国においても精神が求めるものの充足を確かなものにするとであり、文士たちが扇動者となって国民と結んで権力に対抗することであり、精神の闘争の場でもある民衆の戦いに対して、言葉の力すべてをあたえることなのである。[33]

ハインリッヒ・マンはこうして文士が積極的に国民に働きかけて、社会変革の原動力にならねばならぬと説いたが、この点だけに限ると、彼の考えは表現主義の周辺にあった作家たちの間で共有されるものである。エルンスト・トラー、ヴァルター・ハーゼンクレーバー、ヨハネス・R．ベッヒャー、クルト・ヒラー、クラブント、ルードヴィッヒ・ルービナー、ゲオルク・カイザー、ルードルフ・レオンハルト、プフェムファートらは、おしなべてこの傾向をもっていた。しかしながら、ハインリッヒ・マンのようにドイツ精神の呪縛から完全に己を解放できたのは、ハーゼンクレーバー、ヒラー、レオンハルト（ただし彼の場合は 1916 年以降）、プフェムファート、ルネ・シッケレらのみであり、表現主義者と言われる作家や詩人の総数を考えてみると決して多い数ではないのである。例えば、ルネ・シッケレやイヴァン・ゴルといったアルザス出身の文士たちが抱く世界市民主義思想にも取り込まれていく。

5．文学改革を通しての社会改革

文学改革を通しての社会改革、つまりヴィルヘルム体制からの脱却は、ハインリッヒ・マンが『精神と行為』の中で示唆しているように、愛国主義的な「ドイツ精神」を克服することによって初めて可能なものであった。しかし、多くの教養市民層は一部を除いてそれを克服できなかったばかりか、ドイツ革命の成果たるワイマール共和国時代においても、ドイツの国粋主義、国家主義は、後退するどころかさらに培われていったことは、後の歴史が示している通りである。ここで思い至るのは、ドイツ文学の特殊性である。イギリス・フランスに比べて近代国家形成が著しく遅れたドイツにおいては、文学は国民意識高揚のための有効な武器のひとつとして発展してきた。いわゆる「国民文学」である。ヴィルヘルム朝時代のギムナジウムにおける国語教育では、

ゲーテ、シラーといったワイマール古典作家たちの作品購読を通して、ドイツ民族の素晴らしさや独自性を叩き込むことに重点が置かれた。そしてこの伝統は20世紀に入っても容易に覆らなかったばかりか、それどころか、「ドイツ学」とともにますます幅を利かせていった。文学は20世紀前半のドイツにおいても、国家の枠組みを超えた万人のための文化的所産とはなり得なかったのである。表現主義者たちの発言や声明は、教養市民層の若者たちがその主たる読者であり、他の階層や世代にはなかなか伝わりにくいものであった。例えば、雑誌 «Aktion» の発行部数 8000部は、当時の文芸誌の状況を考えてみると決して少ない数字ではないが、流行作家ヘルマン・ポパートの小説『ヘルムート・ハリンガ』(1910年刊行) は2年間で32万部も売れている。この小説の主人公ハリンガがアルコール中毒・婚前交渉・非ゲルマン化の三大悪と敢然と戦う姿が、当時の若者 (特にワンダーフォーゲル運動に参加していた) の間で大いに受け入れられたのである。[34] さらにこの小説のモチーフの一つである民族浄化の思想は、ドイツ第三帝国成立に向けての動きを既に予感させるものである。これは、文学研究の対象とは成りにくい大衆文学の方がより広範囲で圧倒的数の受信者と政治的影響力をもっていた、という例だが、こうした形での文学と政治の関わり方を表現主義活動家たちが展開することは難しいことであった。彼らのテーゼやアピールは、斬新さと過激さに富んでいたが、同時に古くからの伝統を否定し破壊することに対する不安感を受信者たちに与えることは、避けられなかったのである。前の世代から引き継がれた伝統を打ち破ることは決して容易ではないが、表現主義運動の担い手たちはそれを革命的に実践しようとした。しかし、旧来の価値観をすべて塗り替えようとした彼らの活動にも、一部においては内面の奥深くに旧来の価値観が存在し、またドイツ国家主義の伝統が流れていたのである。したがって、このような表現主義の活動を捉える際の問題は、表現主義運動を一つのまとまった大きな動きととらえてしまう点にあるといってよいだろう。こうした捉え方に基づくと、この運動がヴィルヘルム朝の社会や芸術観の対立概念として浮かび上がってくるのだが、実際の表現主義運動における政治的方向性に統一性を見い出すことは難しい。彼らの活動にはヴィルヘルム体制に替わる対案としての社会や芸術のあり方についての具体的なヴィジョンが欠けていた。ハインリッヒ・マンが『精神と行為』のなかで指摘していたように、「ドイツ精神」への崇拝を克服することが、ひとつの鍵であったには違いない。しかしながら、文学の発信者たる作家・詩人にそれができたとしても、受容する側に素直に受け入れられたとは限らない。国家主義教育で鍛え上げられた多くのドイツ国民の価値観を根本から覆すには、表現主義の運動家たちの声はあまりにも空想的で飛躍したものであったし、個々の考え方は、現実的な形をとって収斂していくことができなかったのである。[35]

さらに、当時の彼らの属していた教養市民層と他の階層との乖離を埋めるには、ペンという武器だけでは不十分であったとも言えよう。わずか二十年後の1930年代には、映画、ラジオ、大衆野外劇といった様々なメディアが、その政治的力を遺憾無く発揮する時代がやってくるのである。

注釈

[1] 特に注目に値する研究は、Stark, Michael: Ungeist der Utopie? Zur Intellektuellenrolle in Expressionismus und Postmoderne. In: Anz, Thomas / Stark, Michael (Hg.): Die Modernität des Expressionismus. J.B.Metzler. 1994 である。

[2] 表現主義 Expressionismus は 1914 年以降、雑誌の中でも使われ始めるが、今日表現主義運動家とされている、作家・画家たちはこの名称を用いるのを好まなかった。画家カンディンスキーやルネ・シッケレ、カシミール・エートシュミットなどはこの名称を否定的に受け止めている。Vgl. Pörtner, Paul: Literatur-Revolution 1910-1925 Zur Begriffsbestimmung / Was heißt „Expressionismus"? In: Rötzer, Hans Gerd (Hg.) Begriffsbestimmung des literarischen Expressionismus. Darmstadt. 1976

[3] Schlabe, Fritz: Literarische Zeitschriften 1910-1933. 2. Aufl. Stuttgart. 1972. S.41

[4] Weisbach, Reinhard: Wir und der Expressionismus. Berlin 1973. S.56

[5] 雑誌の発行部数に関しては Schlabe, Fritz: Literarische Zeitschriften 1910-1933. 2. Aufl. Stuttgart. 1972 および Raabe, Paul: Die Zeitschriften und Sammlungen des literarischen Expressionismus. Stuttgart. 1962 による。

[6] ただし終戦後の «Sturm» は政治色を急激に増し、社会主義・共産主義思想を前面に押し出した政治雑誌といえるものに変貌している。

[7] Fischer, Ernst: Der Schutzverband deutscher Schriftsteller 1909-1935. Frankfurt am Main. 1980. S.152

[8] Das deutsche Soldatenbuch, herausgegeben vom SDS. Berlin. 1914

[9] 例外はある。たとえば、雑誌 «Aktion» のなかでプフェムファートは積極的な戦争批判を 1912 年に繰り広げている。ハインリッヒ・マンやルネ・シッケレも戦争反対の立場を保持し続けた。

[10] Hegele, Wolfgang: Literaturunterricht und literarisches Leben in Deutschland (1850-1990) Würzburg. 1996. S. 15

[11] Goldscheider, Paul: Die Erklärung deutscher Schriftwerke in den oberen Klassen höherer Lehranstalten, Berlin. 1889

[12] Lehman, Rudolf: Der Deutsche Unterricht. Berlin. 1890

[13] Hegele, Wolfgang: Literaturunterricht und literarisches Leben in Deutschland (1850-1990) Würzburg. 1996. S. 16

[14] 潮木 守一『ドイツの大学』講談社学術文庫 1992 年 183～185 頁

[15] Heym, Georg: Dichtungen und Schriften. Band 3. Tagebücher. Träume Briefe. Hg. von Karl Ludwig Schneider (Heinrich Ellermann) 1960. S. 138

[16] ebd. S. 164

[17] Vondung, Klaus: Die Apokalypse in Deutschland. München. 1988. S.189

[18] Marc, Franz: Im Fegefeuer des Krieges. In: Sturm 1 (1916/1917), H.1 (April 1916), S.2. Später in: Manifeste und Dokumente zur deutschen Literatur 1910-1920. Expressionismus. Hg. von Thomas Anz und Michael Stark. Stuttgart (Metzler) 1982. S.303-305. Zitat hier S.304

[19] ibd. S.305

[20] マルクはこの論文を書いた翌年の 1916 年、ヴェルダン要塞の攻防戦で戦死している。

[21] Marinetti, F. T.: Manifest des Futurismus. In: Der Sturm 2 (1911/21), Nr. 104 (März 1912), S.828-829. Später in: Manifeste und Dokumente zur deutschen Literatur 1910-1920. Expressionismus. Hrsg. von Thomas Anz und Michael Stark. Stuttgart (Metzler) 1982. S.588-591

[22] Wedekind, Franz: Deutschland bringt die Freiheit. In: Berliner Tagesblatt vom 27.9.1914

[23] Mann, Thomas: Gedanken im Krieg. In: Die Neue Rundschau 25 (1914), H.11 (November), S. 1471-1484. Später in: Mann, Th.: Politische Schriften und Reden 2. Frankfurt, Hamburg 1968. S. 7-20.; Zitat hier S. 9

[24] Huebner, Friedrich Markus: Krieg und Expressionismus. In: Die Schaubühne 10 (1914), Nr. 48 (3. Dezember), S.441-443

[25] Der Krieg. In: Die Aktion (1911) Nr. 29. Hrsg. Franz Pfemfert. S. 1

[26] «Vorwärts» は社会民主党の機関紙である。

[27] Pfemfert, Franz: Ist die Sozialdemokratie revolutionär? In: Die Aktion (1911) Nr. 34. Hg. von Franz Pfemfert. S.1-2

[28] Pfemfert, Franz: Die Besessenen. In: Die Aktion (1914) Nr.31. S.1

[29] Schickele, Rene: Pazifismus. In: Die Weißen Blätter,3 (April-Juni 1916), S. 83

[30] Klabund: Bußpredigt (Geschrieben Juni 1917) In: Die Weißen Blätter 5 (1918), Juli-September, S.106-108

[31] Mann, Heinrich: Geist und Tat. In: Pan 1 (1910/11), Nr. 5 (1. Januar1911), S. 137-143. Später in: Manifeste und Dokumente zur deutschen Literatur 1910-1920. Expressionismus. Hg. von Thomas Anz und Michael Stark. Stuttgart (Metzler) 1982. S.269-273. Zitat hier S.270

[32] ibd. Zitat hier S.271

[33] ibd. Zitat hier S.272

[34] 上山 安敏『世紀末ドイツの若者』講談社学術文庫　1994 年 101 頁

[35] 後に、社会主義や共産主義を標榜することになる表現主義の活動家は少なくないが、1910年代における彼らの声は、社会主義や共産主義といった形で収斂していくことはなかった。例えば、ルードヴィッヒ・ルービナーが 1912 年の «Aktion» 2 号に載せた „Der Dichter greift in die Politik“ は、表現主義の政治的スローガンのなかでも代表的なものとしてしばしば引用されるが、この宣言文のは、時事的な政治問題よりはむしろ、抽象的な文明批判や唯物論批判が主な内容となっている。彼は、マルクス主義や労働運動からは距離を置いていたのである。

(博士後期課程)